小特集

六角氏式目と永源寺文書の研究 (一)

中世史における永源寺と永源寺文書 付 長櫃中世文書解題

濱野 未来

はじめに

本特集では、二〇二三～二〇二四年度史料調査の成果として、永源寺文書のうち、中世文書について、新たに作成した目録を載せるとともに、史料紹介および研究ノートを載せている。永源寺文書とその中世文書については、『永源寺関係寺院古文書等調査報告書』(以下、『報告書』)および『永源寺町史』にて詳細な解説がなされている。それらに拠りつつ、本稿では、本特集の前提情報として、中世史における永源寺および永源寺文書の位置づけという点に焦点をあて、簡略に紹介する。なお、永源寺の来歴・永源寺文書の概要については、『永源寺町史』の永源寺編ならびに通史編を参考とした。また、永源寺文書及び永源寺の文化財の現状や展望については、本号の森慈尋氏による巻頭言をご参照いただきたい。

一 中世における永源寺

中世において、永源寺は、朝廷・幕府そして近江守護六角氏との密接な関わりを有していた。永源寺の創建は延文六年(康安元年=一三六一)で、臨濟宗の高僧寂室元光が六角氏頼に請われたことで開山し

た。後光厳天皇からの寂室を天龍寺住持に任じる論旨を受け、足利義詮より公帖が出されるなど、寂室は朝廷・幕府から厚い崇敬を受けていたことが窺える^①。また、足利義満も永源寺を祈願所としている^②。

創建翌年の康安二年には、六角氏頼から熊原村が永源寺に寄進された^③。最も古い寺領の寄進であったこれ以降、寂室に帰依する者を中心に土地が寄進され、永源寺領が固められていった。

明徳五年(一三九五)には、近江国内に散在する寺領への臨時課役が免除され^④、以後も六角氏は永源寺の経済基盤を保護するための奉書をたびたび発給するなど、六角氏は永源寺に対する外護の姿勢を続けた。

応仁・文明の乱以降の永源寺については、五山僧の滞在も特筆すべきである^⑤。当時、戦乱を避けるため、多くの公家や僧侶が京都を離れたが、横川景三や桃源瑞仙、景徐周麟ら京都五山の高僧が永源寺に避難してきている。このとき、彼らを保護したのが小倉実澄である。この小倉氏は、実澄の時代には蒲生郡佐久良に本拠をおき、京極氏に従っていた一族であった。実澄は文武の才があったようで、京極氏の重臣多賀高忠に弓を、飛鳥井雅親に和歌や蹴鞠を学び、漢詩についても、瑞溪周鳳から絶賛されるほどであったという。横川は永源寺滞在中の動向を『小補東遊集』『小補東遊後集』『小補東遊続集』にまとめ

ている。その後、横川は六年、桃源は十年ほどこの近江の地に留まり、滞在中も詩文を作成した。戦国期には、禅僧等を介して、武家や公家を含む様々な文芸ネットワークやコミュニティが形成されたことは、夙に指摘される場所であるが、近江においても、永源寺を拠点として文化的交流がおこなわれていたことは特徴的な点である。

その後、延徳三年（一四九二）から始まる室町幕府将軍足利義材（義植）による六角高頼追討の軍事行動の際に、永源寺は戦禍を被ることとなる。明応元年（一四九二）に永源寺は戦火によって堂塔が悉く焼失した。永源寺が再建に取り掛かった際にも、六角氏は永源寺再興のための勧進に奉加することを家臣団に命じるなど、保護の姿勢を見せている。⁶ 六角氏による永源寺の外護は、寺院経営の面でもみられ、諸公事免除や、⁷ 享祿四年（一五三二）・天文七年（一五三八）・同二年の徳政実施の際、永源寺はその対象外となっている。⁸ また、天文二三年には、六角氏が永源寺内部における掟を定めており、六角氏側の意図としては寺領保護の視点から定めたものと考えられている。⁹

このように、永源寺は、地方寺院でありながら、朝廷・幕府・六角氏・五山僧との関連も密接であり、政治面・文化面の双方で存在感を有したのである。

二 永源寺文書の中世史料

近江地域には、惣村文書や寺社の文書が豊富に残されており、地域史はもちろん、畿内政治史においても重要な史料群が散在しており、永源寺文書もそうした豊富な史料群のひとつである。

永源寺文書の一部については、はやくは『近江蒲生郡志』『近江愛智郡志』などに引用されて知られていたが、平成六年度から九年度に

かけて滋賀県教育委員会による調査と、その後の文化庁による調査を経て、文書群の全体像が明らかとなった。¹⁰ 現在、永源寺文書として国の重要文化財に指定されている文書のほとんどは、栗東歴史民俗博物館に寄託されている。

永源寺文書全体を概観すると、康安元年（延文六年＝一三六一）の永源寺創建後から近世・近代に至る多くの文書によって構成されている。中世文書の内容については、『永源寺町史 通史編』別編「第三節 永源寺町の文化財」の永源寺文書の項目で、簡潔明瞭にまとめられている。¹¹

その記述にもとづく、最古の年紀をもつ史料は弘安二年（一二七九）一月二日付の浅井某畠地売券（この小特集の目録では「浅井恒清売券」）であり、こうした売券や寄進状については、六角氏をはじめとする、在地の有力層等からのものが複数残されている。また、創建後の中世文書のうち、室町時代のもものは、幕府によって発給されたものが多く、いずれも守護不入・諸役免除など永源寺を保護する内容のものとなっている。そして、戦国時代に入ると、その大半が六角氏奉行人奉書をはじめとする六角氏発給文書で占められるようになる。こちらも内容は、幕府発給文書と同様に、永源寺の保護政策にかかわるものとなっている。

加えて後土御門天皇綸旨や三条西実隆書状など、中世史料としては、朝廷、幕府や六角氏との関連を窺うことができるものも多い文書群となっている。

三 長櫃中世文書解題

小特集(一)の論考では永源寺文書のうち、『報告書』で「長櫃文書」

として一括されている文書群内の中世文書を中心に取り上げている。そのため、長櫃中世文書について、いまい少し具体的に概観しておく。

永源寺文書における中世文書の伝来や保存状況については、『報告書』ならびに藤田励夫氏による論考に詳しい。¹²⁾『報告書』の総説によると、中世文書は、主に五つの函に収められ、卷子や帖に表装されて伝わってきたようである。¹³⁾また、そうした伝来状況から、函ごとに目録化された。この五つの函とは、函二二二、函二三二、函二三三、函二四六、函二九〇を指すものと考えられる。これら主となる五つの函に加えて、『報告書』作成時の調査によって、八四点の中世文書(写を含む)が、土蔵の長櫃中から近世や近代の文書と混在したかたちで発見された。これらの新出分が、『報告書』において「長櫃文書」という括りで目録化されているものである。この長櫃文書の中世文書は、『報告書』では、「長櫃文書 中世 一中世」と分類・表記されているが、本稿および本特集では長櫃中世文書と表記することとした。

長櫃中世文書としてまとめられた文書のうち、『報告書』の目録番号長櫃中世一～五六号は、長櫃にあった時点ですでに一括された状態であったという。この一括された文書は、売券二六通・寄進状四通・譲状一通など、永源寺付近の土地の移動に関する証書類が中心となっている。また、年貢算用状や下行状など、永源寺の金銭管理に関する史料も含まれている。これらの他、六角氏関連の史料として、六角義治書状写や六角氏奉行人連署奉書等留書なども見える。なお、これらのなかには、正文の伝わらない文書の写等も含まれている。

本号では、長櫃中世文書のうち、永源寺領分殿村井田井料伏状(四三号)、和南忠長・小倉実隆連署書状案(四八号)、口上之覚(西ヶ峰出入)を中心とした六六～七五号の一括となっている文書群(長櫃中世以外の文書を含む)、北条家朱印状写(七六号)を取り上げる。

四 永源寺文書が有する論点・課題

以上が、永源寺文書および中世文書の概要である。今回の閲覧調査ならびにその後のゼミナール内での検討によって、注目すべき史料や文書群の性質、史料活用についての課題点等が浮上してきた。個々の史料や具体的な論点については、各研究ノート・史料紹介を参照されたいが、ここでは大きく二点を挙げておく。第一に、永源寺文書の性質を考慮して史料を再検討することの必要性である。この点については、永源寺が近世にはいり、全国各地に多くの末寺をもつようになったこと、そうした末寺やその他各所から文書を収集していたことが関わってくる。¹⁴⁾すなわち、中世文書や中世の永源寺に関連する文書のうち、近世の段階で永源寺に移ってきているものが複数存在するのである。¹⁵⁾文書によっては末寺から自主的に進上したと思われるものもあり、¹⁶⁾永源寺文書によって窺い知ることができるのは、六角氏をはじめとする近江や畿内の状況だけに限らない、ということになる。この点については、近世文書に引用された中世文書等も含めた永源寺文書全体を見通しての検討など、多くの吟味が必要であろう。ここでは、中世史料であっても、永源寺文書ならではの性質を踏まえたうえでの分析が重要となることと、右の点が今後深めていくべき課題であるという点を指摘しておくにとどめたい。

第二の点は、永源寺文書に関連する既存の目録や自治体史・史料集の情報に修正・更新が必要となってきたり、というものである。これは、関連する研究が進展することによって生じる欣然たる問題でもあり、あらゆる史料が常に抱える問題でもあるが、少し具体的にこの点について述べておく。

永源寺文書について知る際に、まず参照すべきはその史料目録であ

るが、永源寺文書については三種類の目録が存在する。すなわち、滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『永源寺関係寺院古文書等調査報告書』（滋賀県教育委員会、一九九八年、以下『報告書』）、文化庁文化財部美術学芸課『永源寺文書目録』（文化庁文化財美術学芸課、二〇〇二年、以下『目録二』）、東京大学史料編纂所による一九八七年一〇月の史料調査時に作成された目録（『東京大学史料編纂所報』二三号、一九八九年）、の三点である。文化庁による『目録』は、管見の限り、国立国会図書館はじめ公立図書館や大学等研究機関の図書館でも所蔵はなく、入手・閲覧が困難となっている。対して、『報告書』は、国立国会図書館（本館・関西館）や全国の公立図書館のうち二一館に所蔵されているほか（二〇二四年七月時点）、大学等研究機関の図書館にも所蔵されている場合があり（二〇二四年七月時点で二八館）、こちらのほうが比較的閲覧に容易い。また、『目録』は目録番号など『報告書』の目録を踏襲したものになっているため、まずは『報告書』の参照が前提となろう。『報告書』は、永源寺文書内の各函や内容による分類ごとの総説が載せられており、文書発見時の状態についても詳細である。加えて、一部文書の積文も掲載されているほか、絵画・書跡・典籍編の目録、巻末の資料編では、末寺一覧や永源寺周辺地図、歴代住持一覧なども附されており、その点でも利便性が高い。

永源寺文書の翻刻について、複数がまとまったかたちで所収されているものとしては、『報告書』、『永源寺町史 古文書編』、『戦国遺文 佐々木六角氏編』の三つがある。いずれも中世文書を中心に一部のみとなっている。『永源寺町史 永源寺編』では、網文や書き下し、用語の解説、原文書の写真が載せられているのに加え、『報告書』の積文番号が併記されており、非常に簡便である。また、『報告書』と『永源寺町史 永源寺編』の翻刻は、原文書での改行箇所を示してお

り、原文書との照合の際の便宜が考慮されている。永源寺文書のうち、六角氏関連文書については、『戦国遺文 佐々木六角氏編』に編年順で所収されており、六角氏との関連を掴むには最適な史料集であろう。これら三つの文献に所収されているものは無論重複する史料もあり、それらの翻刻・年号・人名比定については、各文献で差異がある場合がある。そのため、史料によっては、詳細に内容を検討するにあたり、三者の情報を校合する必要があるのである。

以上の状況から、より永源寺文書を研究に活用しやすくすることを目的に、東島ゼミナールでは、「永源寺文書中世文書目録」を作成した。ただし、本目録の位置づけは、新たな史料目録すなわち別バージョンの作成ではない。既存情報をアップデートし、かつ各目録・史料集等の情報へアクセスしやすくするハブ的機能を持たせたものであり、いわばポータルサイトに近い位置づけのものとして作成した。これまで述べた史料情報の更新に関する点については、本目録の凡例にも簡略ながら改めて示しており、目録の詳細についてはそちらをご参照いただきたい。

本特集では、この目録に加えて、これまで詳細に検討されてこなかった文書について研究ノートおよび史料紹介という形で取り上げている。これらの目録と論考が、永源寺文書の活用の端緒となれば幸いである。

注

- (1) 永源寺町史編さん委員会編『永源寺町史 永源寺編』（永源寺町、二〇〇二年）一〇頁、同編『永源寺町史 通史編』（東近江市、二〇〇六年）二六四―二六五頁。足利義詮公帖（康安二年二月一七日）、は『永源寺町史 永源寺編』三一―三三頁に所載。滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『永源寺関係寺院古文書等調査報告書』（滋賀県教育委員会、一九九八年、以下、

『報告書』函二三二・一号。なお、足利義詮からはその後も再び公帖がだされている。また、後光厳天皇の綸旨については、寺内の歴代記『瑞石歴代雑記』中に言及されている。

- (2) 室町幕府管領奉書（永徳三年五月二八日）、前掲註(1)『永源寺町史 永源寺編』三五七頁所載、『報告書』函二三二・七号。
- (3) 六角崇永書状（康安二年九月二日）、前掲註(1)『永源寺町史 永源寺編』三一六頁所載、『報告書』函二三四・九号。
- (4) 六角満高書下（明徳五年七月四日）、『報告書』函二三四・一〇号。
- (5) 小倉実澄および実澄による五山僧との交流については、前掲註(1)『永源寺町史 永源寺編』三三〇～三三三頁、『永源寺町史 通史編』二七八～二八一頁、中川泉三編『近江蒲生郡志 卷九』「第四編 応仁文明の乱」（弘文堂書店、一九八〇年、初出一九二二年）、『近江愛智郡志 卷一』（弘文堂書店、一九八一年）、東桜谷郷土志編集委員会編『東桜谷志』（東桜谷公民館、一九八四年）等を参照。
- (6) 六角氏奉行人連署奉書（明応四年四月五日）、前掲註(1)『永源寺町史 永源寺編』四三二～四三三頁、『報告書』函二三四・一五号。
- (7) 六角氏奉行人連署奉書（天文一七年二月二三日）、『報告書』函二三四・四六号など。
- (8) 六角氏奉行人連署奉書（享祿四年二月二日）、『報告書』函二三四・六四号、六角氏奉行人連署奉書（天文七年九月二三日）、『報告書』函二三四・六五号。
- (9) 六角氏奉行人連署奉書（天文二三年四月二三日）、前掲註(1)『永源寺町

史 永源寺編』四六八～四七〇頁、『報告書』函二三二・二一号。なお、『永源寺町史 永源寺編』四七二頁では、六角氏式目で寺院の自治を一定程度認める立場をとっている六角氏が、かなり立ちいつて物事を定めていることについて、異例と評価している。

- (10) これらの成果については、前掲註(1)『報告書』としてまとめられている。
- (11) 前掲註(1)『永源寺町史 通史編』二四八～二四九頁。
- (12) 前掲註(1)『報告書』三六四～三六七頁、藤田励夫「永源寺文書の伝来について——中世文書を中心に」（『古文書研究』五四号、二〇〇一年）。以下、中世文書の伝来状況については、この二点に拠る。
- (13) 前掲註(1)『報告書』三六九～三七二頁。
- (14) 前掲註(12)藤田論文。
- (15) この点については、本特集の佐野論考も関連するため参照されたい。
- (16) この点については、本特集の森下論考を参照されたい。
- (17) マイクロフィルム一九八七～四七、一九八七～四八、および写真帳六一七～六一〇五の第一～五冊は、このとき撮影されたものである、なお、同所が一九九九年二月に撮影した、長櫃中世文書、および函二三三は、同一九九九～四八および六一七～六一〇五の第六～七冊に収められている。また一九九九年撮影分に限っては、二〇二四年九月の閲覧時点において、所内端末よりHi-CAT Plus上の文書名一覧を見ることが可能である。

（本学大学院博士課程後期課程）